

信心即仏性

涅槃經の文(その一)

信樂釈の御自釈に続いて、聖人は本願成就の文を引いておられるが、これは後に改めて詳説することにして、その次に引かれた涅槃經の文について味読することにする。その全文は次の如くである。

「涅槃經に言わく。

善男子、大慈大悲を名づけて仏性と為す。何を以ての故に、大慈大悲は常に菩薩に随うこと、影の形に随うが如し。一切衆生、畢に定んで、当に大慈大悲を得べし。是の故に説きて、一切衆生悉有仏性と言えりなり。大慈大悲は名づけて仏性と為す。仏性は名づけて如来と為す。

大喜大捨を名づけて仏性と為す。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、若し、二十五有を捨つること能わずば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能わじ。諸の衆生、畢に當に得べきを以ての故に、是の故に説きて、一切衆生悉有仏性と言えりなり。大喜大捨は即ち是れ仏性なり。仏性は即ち是れ如来なり。

仏性は大信心と名づく。何を以ての故に、信心を以ての故に、菩薩摩訶薩は、則ち能く檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を具足せり。一切衆生、畢に定んで、常に大信心を得べきが故に、是の故に説きて一切衆生悉有仏性と言えりなり。大信心は即ち是れ仏性なり。仏性は即ち是れ如来なり。

仏性は一子地と名づく。何を以ての故に、一子地の因縁を以ての故に、菩薩は則ち、一切衆生に於いて平等心を得たり。一切衆生、畢に定んで、当に一子地を得べきが故に、是の故に説きて、一切衆生悉有仏性と言えりなり。一子地は即ち是れ仏性なり。仏性は即ち是れ如来なり、と。」(已上)

仏性の問題

涅槃經は、釈尊入滅に当たつて説かれた經典であつて、仏弟子をはじめとして、一切衆生悲傷のどん底に、仏身常住と一切衆生悉有仏性を説かれたものである。

これ即ち仏自ら諸行無常の法則に従つて入滅するに當つてこそ、かえつて仏身の常住不滅を説き、更に一切衆生に悉く仏性あることを説かれるのである。今聖人は、信樂を積するに當つて、この涅槃經獅子吼品の一切衆生悉有仏性論を引かれたるは如何なる真意であろうか。

憶うに仏性の問題は、長い間仏教徒に課せられた問題であつた。五性各別説と云い、悉有仏性論と云い、永久に解くべからざる問題である。聖人は、はじめ叡山台嶺の高きにあつて、聖道を行学せられ、忠実にこの問題を解かんとし、内省自証の世界において、仏性開覚に精進せられたのである。本覚の仏性論はわかる、始学修行の道も示されてある。けれども二十年の修行は、一切の経論を裏切つた。深い無明煩惱の雲霧は晴れるに由なく、真如の月の光は拝めない。尋ぬれば尋ぬるだけ、仏性ならぬ十悪五逆、謗法闡提、根も葉も枯れ果てたる凡夫の自覚のみ深まつて、よせ来るものは群賊悪獸貪瞋二河のみではないか。「いずれの行も、およびがたき身なれば、とても地獄

は一定すみかぞかし。」しかるに、聖人は、法然上人の御化導によつて、弥陀他力の本願に帰し、如来廻向の大信心、南無阿弥陀仏に更生せられた。

信心とは、まことの心である。まことの心とは如来の心である。如来心とは、即ち仏性である。ここにおいて、失われた仏性は名号によつて恵まれ、はじめ、如何なる衆生も、機の善悪、賢愚、修行の多少、久近を問わず、男女老少を分かつたず、悉くこの信心によつて救われる。一切衆生悉く仏性あり、との仏教の大理想は実現されたのである。

われらはここに、この仏性の問題の根本的解決を得ることが出来たのである。これ即ち、悉有仏性論を説ける涅槃経を、大胆にもここに引証せられたる祖聖の真意があるのである。

されば、一度聖道を捨てたる聖人は、他力の大行大信の世界に、再び捨てられたる聖道門をも生かし、仏一代の教説を念仏道のうちに入受されたのである。しかも、死して浄土において肯定したのでなくて、現実の大信心底に、仏一代の一切経を肯定し咀嚼せられたのである。我らは今、涅槃経の文について、略説するであろう。

大慈大悲

「涅槃経に言く。善男子、大慈大悲を名づけて、仏性と為す。何を以ての故に、大慈大悲は常に菩薩に随うこと、影の形に随うが如し。一切衆生、畢に定んで、常に大慈大悲を得べし。是の故に説きて一切衆生悉有仏性と云へるなり。大慈大悲は名づけて仏性と為す。仏性は名づけて如来と為す。」

大慈大悲、大慈とは与樂であり、大悲とは抜苦である。この大慈大悲は、必ず菩薩の具すべき仏性そのものである。即ち衆生の生死苦悩にあるを見て、その苦を抜き樂しみを与えんとするは、仏道を成就せんとする菩薩の生命でなくてはならない。大慈悲のない処にどうして仏道があるう。本覚仏性の開覚は実にこの大慈悲によるのである。

以上は経の表面に現はれたる聖道的な見方であるが、もし、「常に大慈大悲を得べし、是の故に 説いて一切衆生悉有仏性と云へるなり。」の文において、得るとは、阿弥陀仏の大慈悲を得ることと解すれば、大慈悲をおこす菩薩とは、法蔵菩薩となつて来る。大慈悲は決して、衆生の煩惱の改造によるのではなくて、涅槃界より流れ来たる如来の生命でなくてはならない。聖人は実にかかる心読によつて、如来の大慈悲の仏性を名号のうちに獲得することを、この文をかりて表現せられたのである。

「大慈大悲は名づけて仏性と為す。仏性は名づけて如来と為す。」衆生の信心、そのまま仏性である。大慈大悲の如来心である。困位にあつては仏性といい、果位にあつては如来という。仏性とは涅槃そのものであり、如来それ自身である。我らは如来の大慈悲そのままの大信仏性を、名号によつて頂戴せることを喜ぶべきである。

大喜大捨

「大喜大捨を名づけて仏性と為す。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、若し二十五有を捨つること能わずば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能わじ。諸の衆生、畢に当に得べきを以ての故に、是の故に説いて一切衆生悉有仏性と言えるなり。大喜大捨は即ち是れ仏性なり。仏性即ち是れ如来なり。」

大喜とは、衆生の喜びを喜びとする心、即ち随喜の心、大捨とは愛憎の心を捨てて、一切衆生に対して怨むも親しむも平等なる心、さきの大慈、大悲を合せて四無量心と云はれる。菩薩摩訶薩―菩薩とは、*Bodhisattva*で覺有情、摩訶薩とは、*Mahasattva*で大有情、つまり二つとも菩薩のことである。

菩薩は、大喜大捨の心によつて、二十五有の生死の迷いを離れて、阿耨多羅三藐三菩提、即ち、無上菩提の仏果を得るのである。一切衆生は畢に、この大喜大捨の心を得るが故に、一切衆生悉有仏性と言うのである。―これが即ち問題である。得るとは、他力の天地では、南無阿弥陀仏のうちにこの大喜大捨の如来心を得るのである。そこで聖道門においては、この二心も前の如く自らおこすものとするのであるが、浄土真宗においては、法蔵菩薩が発したまい、その願の心を名号によつて衆生は得るのである。法蔵こそ、二十五有の生死の苦をこの大喜大捨によつて離れたまい、無上道を得て、本有の仏性を六字に成就したまうのである。したがつて、この二心によつて衆生は信心を得るが故に、一切衆生悉有仏性と云われるのである。大喜大捨は仏性である。仏性は即ち如来である。

信心即仏性

次に、

「仏性は大信心と名づく。何を以ての故に、信心を以ての故に、菩薩摩訶薩は則ち能く檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を具足せり。一切衆生、畢に定んで当に大信心を得べきが故に、是の故に説きて、一切衆生悉有仏性と言えるなり。大信心は即ち是れ仏性なり、仏性は即ち是れ如来なり」と。

仏性は信心と名づけられる。何故なれば、菩薩は唯この信心、仏法僧の三宝に対する絶対帰依の信心によつてのみ、布施(檀波羅蜜)、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧(般若波羅蜜)の六波羅蜜を具足して修行成就し、仏性を開覚して、仏果を成就するのである。一切衆生は、畢に定んでこの大信心を得るが故に、一切衆生悉有仏性と言われるのである。・・・この得るといふことが聖人にあつては、南無阿弥陀仏のことであり、他力の大信心のことである。六波羅蜜を行ずるものは、凡夫の煩惱ではない。法蔵菩薩の長時永劫の修行の内容である。即ち南無阿弥陀仏の全内容、全生命こそ、六波羅蜜そのものである。六波羅蜜によつて成就せられたる大信心を獲るのである。この意味において、信心は仏性である。仏性は即ち如来である。

以上の領解も又、四無量心と同じく、一度捨てられたる聖道門を、法体の大行として生かされたのである。一切悉く我らにおいて発起する他力の信の本質となつたのである。されば和讃に言く、

「信心よろこぶそのひとを 如来とひとしときたまう

大信心は仏性なり 仏性すなわち如来なり」と。

一子地

「仏性は一子地と名づく。何を以ての故に、一子地の因縁を以ての故に、菩薩は則ち一切衆生に於いて平等心を得たり。一切衆生は畢に定んで当に一子地を得べきが故に、是の故に説きて一切衆生悉有仏性と云えるなり。一子地は即ち是れ仏性なり。仏性は即ち是れ如来なり。」

一子地とは、菩薩の初地（四十一段）の位のことである。この信に入れば、菩薩は一切衆生を觀ること一人子の如く怨親平等を得て、菩提において退転せず、必ず仏果に至るのである。この位に入れば必ず仏性を開顯するが故に、一子地を仏性と言うのである。しかして一切衆生は必ずこの位に入ることを得るが故に、悉有仏性と言われるのである。

しかるに祖聖は、一子地を淨土における証果とせられた。我らは他力本願によつて、淨土に往生してこの位に入り、一切衆生を平等に一子の如く觀ることが出来るのである。即ち他力の信によつてのみ、かかる一切衆生悉有仏性は可能なのである。和讃に、「平等心をうるべきを 一子地となづけたり

一子地は仏性なり 安養にいたりてさとるべし」
聖人の真意を知ることが出来る。

三即一の仏性

以上の説において、聖人は涅槃經における、悉有仏性論を念仏の世界において領解したもうたのである。我らは、かの涅槃經における阿闍世王の告白、「無根の信」を思い出さざるを得ない。仏性とは無明煩惱に根を有するのではない。悉く涅槃界より現実人生にはたらきかける、如来本願に根ざす大信心そのものである。

しかして、大慈、大悲、大喜、大捨、の四無量心は、如来の大慈悲そのものであり、大信心は、我らの信心であり、一子地は、信心より顯われる彼岸における証果である。されば三者とも我らの仏性そのものである。我らの自覚、信心の本質は、如来の大慈悲であり、一子地は信心より開顯せる果であるが故に、三者は畢に衆生の仏性そのものである。